

Fast life, Slow life

村越真のオリエンテーリング日誌

授業がないのをいいことに講習会三昧。数えてみたら2ヶ月で9回の講習会をし、大量の原稿を仕上げていた。年末・年始に続く、ハイパーな2ヶ月。

講習三昧の日々の始まり

2月1日

週末の講習会のため、北海道に出かけた。北海道オリエンテーリング協会が体協に加盟して、審判講習等の名目で補助金が出るのだという。

金曜日のヘビーな授業を終えて、最終の飛行機で札幌に向かった。翌日はルスツに行って、スキーク世界選手権の打ち合わせ。札幌から70kmの雪道で、自分ほどの程度自力で行動できるのだろうか。それを確かめたくて、レンタカーでルスツに向かった。「すぐABSがかかりますよ」と、レンタカーを借りてくれた山田君に言われた。そう言われたにもかかわらず、最初の信号でいきなりABSを作動させてしまった。

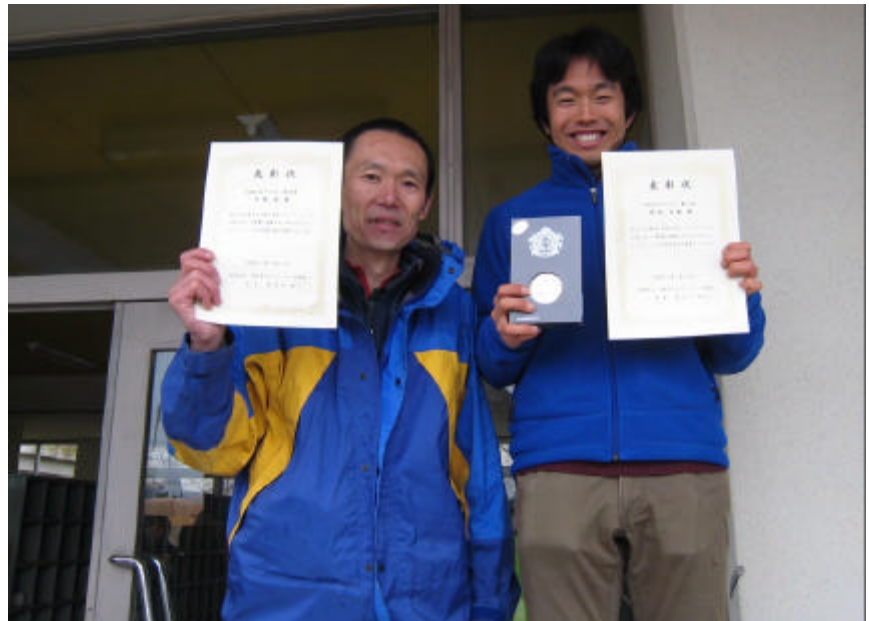
地元の車も雪道は慎重だ。特に中山峠からの下りでは、こんなものかと思うほどのスピードで走っている。一度滑り始めたら、どうしようもないことを地元の人だからこそ分かっていけるだろう。安全スピードの流れの中の雪道自体に怖さはなかったが、トラックの後ろにつくと、舞い上がる粉雪で一瞬ホワイトアウト状態になり、運転に神経を使った。

夕方札幌に戻り、北大のサークル棟までジョグし、北大OLCに簡単な講習を行った。祖父は二人とも北大出身で、曾々祖父もやはり北大の教官をしていたりと、何かと縁のある北大には、勝手に親近感を抱いてしまう。

2月3日

講習会の日、北海道は好天に恵まれたが、関東一円は積雪を含む荒天であった。羽田空港も一時閉鎖されていたらしい。そのニュースをいち早くキャッチした山田君は、「こういう時は身を張って座席を確保した方がいいんです」といって、講習会を中座して、千歳に車を走らせてくれた。

講習会も無事終わるころ、名古屋便は無事とれたとの電話があった。あと



満面の笑みの優勝者の隣に立っても、悔しさはこみ上げてこない。自分こそ「終わった選手」なのだ痛感する一瞬である。しかし、ラップを見るときまだ改善の余地はあると思う。まだ終わったわけじゃない。

は東京便の空席待ちがとれるかどうかだ。名古屋まで帰れば、最悪でも午前1時に清水に帰り着くリムジンに乗れ、明日朝一の大学の仕事にも間に合う。講習会参加者の車に乗せてもらい、千歳を目指した。

千歳まであと10分となった18時ごろ、再び山田君から電話があった。「18:30分の東京便でキャンセル待ちがとれそうなんですけど、間に合いますか？これを逃すと次のキャンセル待ち番号が800番で、ほぼ絶望ですね。」あと10分で千歳についたとして、18:15分。出発15分前は搭乗ぎりぎりの時刻だ。千歳インターから空港までの道のりは、こんなにあったのかと思うほど長く感じられた。預ける荷物に入っているカッターナイフとキーホルダーのアーミーナイフをはずす。荷物が預けられない時には、これは山田君に預けなければならない。

車は15分前ぴったりに千歳空港に到着した。そのまま2階の出発ロビーに向い、携帯で山田君を探し、合流する。出発10分前。荷物も預けることができ、無事機内の人となった。またしても山田君にはたっぷり迷惑をかけてしまった。

2月4日

2年ぶりに耐寒コンパをやった。4年前、研究室の学生が体育会系体質だ

った時、「この時期、寒い屋上で夜景を眺めながら鍋をつつきながら酒飲んだらうまいぞ」といったら、現実のものとなってしまった。それ以来、研究室伝説の行事となった。昨年赴任したアウトドア系の女性の先生にその話をしたら、ぜひ一緒にやらせてくださいというので、この日のコンパとなった。

立春の静岡とは言え、寒さはさすがに厳しい。ブルーシート、テントマット、寝袋は十分あるが、それでも夜も更けて皆がダウンし始めるとさすがに寒さが応える。3時には研究室に退散し、しばしの仮眠を取る。

2月10日

関東学連リレーのOB対抗の部に参加した。数年前、東大OBベストチームで出場したが、筑波OBに優勝を阻まれた。2年ほど前から加藤のラブコールがあったが、自分の調子も今一つなのと時間がとれないでのびのびになっていた。30歳代後半だが今年絶好調のカッシー、若手のホープ加藤、二人のナショナルチームメンバーと一緒にこのリレーを走れるのも最後かもしれない。そんな思いが去来する。トップタイム48分に対して52分弱。プラス10%はいただけない。心拍数170まであがっているのに、ちっともスピードが上がらない。1走でレース途中までは学生の中に埋もれて走る。リレーの

1走としては悪い位置ではなかったが、己の限界を思い知らされる。帰りの新幹線では、珍しく熟睡。

2月17日

宮内とともに、静岡の山岳会に頼まれた読図講習会を行う。朝から気分的に不調で、講習中はやや頭痛もあった。草薙で講習を終え、大学に帰るランでは不整脈がでて歩く始末。

体調は今ひとつだったが、講習会での反応は上々だった。少人数で、しかも日頃から人間関係のある人たちのグループだったのがよかったのかもしれない。「前読めなかった(地図上の)ものが読めるようになった」という参加者の言葉がうれしい。

2月19日

3月上旬に発行する予定の「山岳地図の読み方」は、予定では校了しているはずだった。実際、先週末には、校了用のPDFをすべてチェックしおえていた。ところが昨日届いた学会誌「地図」の添付図「立山・剣」の集成図の作成にまつわるエピソードを見て、この図をどうしても入れなくなった。明治期に「登れない山」とされていた剣岳を陸軍陸地測量部の測量官柴崎芳太郎が「初登頂」に成功した。しかし、石材の運搬の関係で3等三角点を設置することができなかった。昨年その業績の100周年を記念して、剣岳周辺の国内最高峰の登山地図が作られると同時に、剣岳山頂に3等三角点が設置され、しかもその選点者として柴崎芳太郎の名が記されたというものだ。そのことをブログにアップして、「残念、もう少し早ければ・・・」と編集者の山本さんにメールすると、さっそくアタリがあった。「間に合います。ぜひこのエピソード、コラムに使いましょう。」さくっと原稿を書き上げ、コラム一つを差し替えた。大会のトラブルに臨機応変に対応しているような即興感覚が楽しい。

2月23日

日本国際地図学会の総会に出かけた。元々評議員なので出席すべきなのだが、昨年投稿したハザードマップ読みとりの論文が学会賞をもらったので、他の予定をキャンセルして出ざるを得なくなったのだ。GIS等の利用で多様な地図が作られているが、主題図の利用についての心理学的研究は緒についたばかりだ。それを取り上げたことが評価されたい。様々な機会に地図を使い、また講習をしていると、地図について研究しなければならないことがいくらかでも出てくる。

静岡に早く帰り着いたので、地図講

習会の講師をした後クライミングジムにいている宮内に合流して、ボルダリング練習をする。講習会を任せただけ、実はちょっと不安があったのだが、宮内の講習は思いのほか好評で、受講生から「楽しかった」という感想が聞かれたそうだ。講習を通して地図を読み解く楽しさが伝わったという実感が、新たな講習会を開こうという意欲を支えてくれる。

試練の一週間

2月25日

様々な仕事が重なって、疲れ果てた一週間だった。25日は前期入試。個別学力試験自体は、受験者数も900人程度だし、試験も3教科で、午前・午後各1コマで終わる。センター試験の運営を世界選手権とするなら、地元の大会運営みたいなものだ。

翌26日は附属学校で危険認知のデータ収集をかねた授業を行なわせてもらう。朝から焦って車を飛ばしたせいで、夕方にはぐったり。翌27日は、東京の文部科学省での「冬山の登山研修安全検討委員会」に出席、その後は委員の一人、A先生と昼食を共にしながらのおしゃべり。道迷いを研究する数少ない仲間同士で、話はつきない。

週の後半には、入試合格者の資料ができあがる。資料自体はチェックにチェックを重ね作成されるものだが、ミスがゼロという保証はない。毎年入試ミス防止についての通達が文部科学省から出されるにもかかわらず、大学入試のミスはなくなる。山形大学は数年前、センター試験の得点計算のプログラムミスで1億円近い見舞金を出した(つまり教員から集めたということだ)という。

土曜日は入試委員会で計算チェックをするが、気分は世界選手権のレース前日ようだ。どんなにチェックしても、まだどこかにミスが残っているのではないかという気持ちが抜けない。

その後、JOAの理事会と総会のため、原宿に向かう。総会に臨む専務理事は株主総会に臨む社長のようなものだ。業績好調ならともかく、今のオリエンテリング界はいわば業績不調である。総会直前はいつも憂鬱な気分になるのだ。

その晩は神宮外苑にある日本青年館に泊まった。地図を見ると、表参道を横切る渋谷川を暗渠にした道はそのままくねくねと千駄ヶ谷付近までのびている。国木田独歩が「武蔵野」に描いた田園風景は、このあたりである。今の街からは当然のように往事の様子を忍ぶことはできないが、翌朝は国木田



学連リレーで、2走のカッシーから3走の加藤へ。このふたりと走れるのも、あと何度あるだろう？



耐寒コンパにて。何の役にも立たないことだからこそ、「この研究室に来て、ほかではできないことができた」と思ってくれることがうれしい。



2月の読図講習会では、整置の時に地図を地面の上に置いて、その周りを自分が回るイメージを強調して教えてみた。手続きからいっても、この方が自然な気がする。こんな指導法の蓄積も、まだまだこれからの仕事だ。

独歩になった気分、会議のある原宿まで渋谷川(の暗渠)に沿って歩いてみた。

表参道の交差点のロッテリアで朝食をとりながら、窓の外を走る車の流れを見ている時、ふと、こんなことを思った。20歳代は自分の力を伸ばすことに専心した。30歳代はそれを教育や研究に、コーチングに生かすことに専心した。40歳代はそこで得たものをさらに大きく世に問うた。いずれの10年も次の10年の礎となり、また満足感を与えてくれた。これからの10年は、きっと大小さまざまな組織と人間関係の中で、これまで自分が蓄えてきたものが試される時期なんじゃないだろうか。「株主総会」も、自分を成長させる貴重な糧なのだ。そう思うと、いつもと違う気分総会に臨めた。

怒濤の原稿

3月12日

今日で後期試験も終わった。後は計算処理的にも作業的にもアドリブがきく追加合格が待つだけだ。

しかし、仕事が集中する時はするものだ。測量協会から、先日地図学会で受賞した論文のエッセンスをテクニカルレポートにしてほしいという依頼が来ていた。エイ出版の山本さんから、同社のフリーペーパー「フィールドライフ」でナビゲーションの連載をしたい、また同社がこの春から出版するトレイルランニング専門誌タカタツの方に原稿がほしいと言ってきた。いずれも追加合格の処理が終わらない3月中に仕上げなければならない。タカタツはヤギ君に振って、共同執筆することにした。この世界に隠れている多くの優秀な人材を世に出すことは、今や僕の重要な仕事の一つである。

「フィールドライフ」はさすがに断るったら、「じゃあ、宮内さんに書いてもらって、それを村越さんが監修したら・・・」「いや、その方法の方が時間がかかるんです」というやりとりの後、引き受けざるをえなくなった。

そうこうするうちに、今度はヤマケイのライターから、コンパスの製品テストをするからコメンテーターになってほしい旨の依頼が来た。コンパスと聞いたからには引き受けない訳にはいかない。その後、詳細がファックスで送られてきた。15日か16日には取材をしたいという。そんなタイトな日程を聞いてたら引き受けなかったよ。

おまけに後日談になるが、送られてきたPDFの初稿がひどかった。PDFに修正を入れるのは面倒くさいのだ。これなら自分で書いたほうがどれほどましだったことか。怒濤の原稿攻撃を1990年代のユーミン気分クリア。

3月13日

ルスツに出かけた。スキーO世界選手権のために選ばれたイベントアドバイザーは、ややスタンスは甘いが楽天的なヴェリ・マルコ。旧知の仲だ。それにフィンランド協会が派遣してくれたエキスパートのハンヌ。OCAD利用はもちろん、スキーからモビルの運転まで、スキーOのすべてに習熟しているエキスパートだ。フットなら、どんなレベルの大会でも、卒なく仕上げる自信はあるが、スキーには今ひとつその実感が乏しかった。だが、これだけのスタッフが揃うと、そんな心配も一瞬のうちに吹き飛んでしまった。

3月14日

ルスツでの短い滞在を終え、朝霧に向かった。明日は朝霧野外活動センタ

ーで、野外活動指導者向けのナビゲーション講習会を宮内と担当することになっている。この日は朝霧の別荘で「ルームシェア」をしているKさんと宮内のところにおじゃました。Kさんは音楽を生業にしている。この日も、Kさんのところには次のコラボレーション相手の若手とその姉妹が滞在して、にぎやかだった。それぞれの分野で好きなことを追求しているKさんと宮内は、分野の違いを越えて話がかみ合ったり、お互いの考えに触発されることがあるという。帰宅早々、ビデオを撮りながらあてもないこうでもないとカヤックのエルゴメーターを漕いで、合理的な動きについて宮内と議論している様子を、Kさんは興味深そうに眺めて、時々僕らとは違う視点のコメントをする。そんな二人の生活を見ていると、大学院時代の生活を思い出した。あのころ、毎日様々な締め切りに追われ、今と変わらないくらいのfast lifeだったはずなのに、研究室の同僚と毎晩2時間くらいかけながら、夕食を作って食べ、研究の話から日常の話に明け暮れるゆったりした時間が流れていた。そんな20年も前のことが、少し懐かしく思い出された。

3月15日

朝霧野外活動センターでのナビゲーション講習会。対象が野外活動指導者であることを意識して、地図を使った活動の危機管理などに時間を割いた。県の上級指導員の資格を取ろうとする人たちだけに、受講態度も感想も悪くはなかったが、一般の登山者向けに行った時のような「目から鱗が落ちる」ような体験を提供したという実感が乏しかった。

それでも地図が読めることが野外活動の基本スキルであることを理解し、ミニオリエンテーリングではナビゲーションのおもしろさを実感してもらえたのではないだろうか。

3月16日

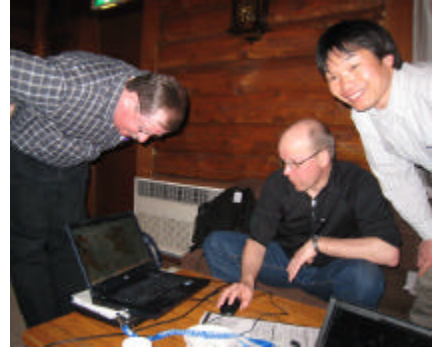
富士の丸火で、コンパステストの取材につきあった。ついでに前からやって見たかった直進のテストを行った。n=3なので、客観的なテストとは言い難いが、製品による直進性能の差は、僕たちが使っているかぎり、プレートなしのコンパスも含めて、あるとは言いがたかった。その結果が得られたのは大きな収穫だった。

ライター、写真家ともにアウトドアで遊んでいるようで、おにぎりを囲みでのテスト後の会話も楽しかった。11月のA&FのMTB24時間耐久レースに彼らも出ていたという。近くを歩いていると、その足跡はしばしば交錯

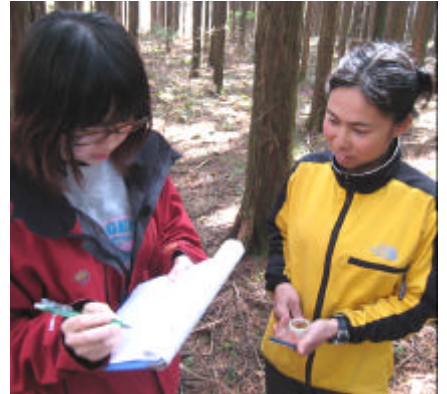
するものだ。



久しぶりのボルダリング。筋力はもちろん、ムーブ（動き）にもまだまだ不満がある。だが、それをビデオで撮りながらあれこれと議論するのは、楽しい。



ルスツでイベントアドバイザーを迎えて。左がヴェリ・マルコ、中央が「外国人助っ人」ハンヌ。右はナショナルコントローラーの木村君。



丸火公園で、コンパステストの取材につきあう。8種のコンパスを使って宮内の誤差は平均たったの1度。挑戦するつもりでやった僕の平均誤差はその3倍はあった。ナビゲーションマスターへの道のりはますますとおい。

3月18日

久しぶりに日本平を越えて走って帰る。後半やや心臓の出力低下感はあるが、元気に走れる。

3月22日

チーム阿蘭梨が村山口で撤収をかねてトレーニングしているが、僕は卒業式があり、夜も謝恩会もあって、参加することができなかった。ちょうど等高線読解の実験を企画しており、全日

本チャンピオンからデータを取る絶好の機会を逃すのは惜しかった。

謝恩会は17時からで、例年より2時間も早い。なんだ、車とばせば宿であるクリッククラックにいて、カッシーのデータがとれるじゃないか。

卒業式は昼からなので、午前中は大学の裏山で地図調査をし、その後卒業式に出かけ、一端大学に帰って実験プログラムの最終チェックをした後、謝恩会に参加した。謝恩会では希望の学生にお姫様だっこをするのが恒例になっており、学生数人をだっこしてやっているうちに、「Tさん(身長180cmは優に越え、体重も80kgはありそうな男性現職教員の派遣院生)は持てないでしょう」「いや、逆にTさんが先生を持てるんじゃない」ということで、初めてのだっこされ体験。

謝恩会終了後は車を飛ばしてクリッククラックへ。カッシーと利佳ちゃんのデータをとり、23:30には帰宅。

3月23日

またまた読図講習会。参加は10名と、少なかったが、その分満足感が高かった。3000円に値上げしたが、「(内容を考えれば)安い」の感想もあり、70%の人が「期待以上の内容」と評価。講習後は、ジョグでクライミングジムにいて、宮内と二度目のクライミング。テキストには「筋力はいらぬ」と書いてあるが、最低限の筋力は必要だ。この2週間、食卓を使って懸垂に励み、東さんの「インドアクライミング」を読んだ。筋力のムーブも少しだが改善した。久しぶりに体を使って遊んだので、翌日は朝からすっきり。頭もシャープだった。

3月25日

研究室の追いコン。卒業生は教員、大学院へと巣立っていく。一時は退学も考えた学生も、希望をかなえ臨床系の大学院へと進学を決めた。成長した彼らと楽しくおしゃべりできるのは、大学にいてよかったと思う一瞬である。

3月27日

午前中、登山研修所の安全登山のための検討会に出席した後、JR東日本の「大人の休日サロン」に「営業活動」に出かける。午後は、今日締め切りの国際学会の概要2pを仕上げる。夕方走ってみると、読図講習会の時参加者の間を走り回って行動観察した時に使いすぎた左ふくらはぎの筋肉痛はまだ癒えていない。でも全日本まではあと3日もある。そう自分を納得させ、焦る気持ちを鎮めた。こんな気分でもレースに向けて準備するのも久しぶりだ。

相馬さんがやってくる

3月28日

9月に開催する三河トレイルの準備に取りかかっていた。女子の招待選手として、一昨年招待したがアキレス腱断裂で走れなかった佐藤光子さんに声をかけると快諾してくれた。じゃあ、男子は？昨年山岳耐久の覇者の相馬さんが清水に来ると聞いていたので、つてのある柳下君に頼んで打診してもらった。内諾が得られたところか、彼自身、僕の読図講習会に興味を持っていたという。おまけに引越先が清水区折戸の三保第一合同宿舎。相馬さんがうちの団地にやってくる！10年前なら、ウハウハして一緒にトレーニングしただろう。いや今でも遅くない。しばらくは先輩面して、日本平のトレイルを教えてあげよう、ロゲインニングにも誘ってみたい。卒業生の色紙には「いつまでも山と女の子の好きな先生でいてください」と書かれた僕だが、この興奮とわくわく感は、どんなすてきな女の子がこの団地に越してきててもかなわないだろう。

追加合格も無事終了。

3月29日

大学で軽く仕事をして大阪へ向かう。今年のフォーラムでは、「読図講習をしよう！」というタイトルで、この4年間の読図講習のノウハウ、その意義を語った。僕一人ではなく岐阜県や三条の藤島君のように、趣旨に共鳴してくれる人が現れ、彼らの元でも講習が同様に成功裏に終わったことが説得力を増したようだ。「絶滅危惧種」とさえ言われるオリエンテーリングだが、今でもその可能性は決して小さくない。そのことを信じている人の多さに勇気づけられる。

3月30日

スタートフラッグでいきなり逆走するなど、地図へのチューニングが十分にできていない。中盤からはまずまずのペースでとばせた。しかし、結果は西尾に1分30秒及ばなかった。後半はオーバーペースと寒さのせいで、思考力が鈍っていた。21Aを制するのにも十分な準備ができていなかったということなのだろう。ここまでの道のりを考えると、悔しさはなかった。

その印象が変わったのはラップ解析を見てからだ。巡航スピード96.8は優勝の西尾を軽くしのいでおり、ミス率が6.5%と、西尾の2.5倍を越える。この山ではナビゲーションのうまさも巡航スピードを決定しているとは言え、まだまだスピードはあるし、改善すべきレッグもあるということだ。それを知ると、レース内容が悔しく思える。

いい兆候である。帰りは新大阪で、阿闍梨のご苦労様会。

(村越 真)



初めてのお姫様だっこされ体験。ピースをする気分がよく分かった。



全日本前日のO-forumにて。読図講習会の実践報告をする岐阜県オリエンテーリング協会の牧ヶ野氏と水野氏



全日本選手権者の二人。体調不良の中連覇を果たした番場(左)と「終わった選手」の自他からの評価を覆し、男子では史上3人目の連覇を成し遂げた鹿島田(右)。



全日本の帰りは新大阪で、阿闍梨の面々とご苦労様会。